

鑑別は容易であった。本法は肝海綿状血管腫の非侵襲的診断法として有用と考える。

33. びまん性肝疾患における ^{99m}Tc -PMT による定量的肝胆道機能解析法の検討

石堂 伸夫 檜林 勇 杉村 和朗
鍋島 康司 福川 孝 井上 善夫
木村 修治 (神大・放, 中放)
梶田 明義 (阪成セ)

肝胆道系の機能を定量的に解析する一手法について考察した。

まず肝胆道系における ^{99m}Tc -PMT の動態モデルを4つのコンパートメントで設定し、それぞれに分布容積 V_i を仮定した。このモデルから直接に導かれる、各コンパートメントでの時間一線量関数を求めた。

患者の心臓と肝臓とに ROI を設定し、それらの time-activity curve を測定しておいた。

心臓で実測された clearance curve に対し計算機上で傾斜法を用いてモデルの内のいくつかのパラメータを求めた。

残りのパラメータに対し、格子法を計算機上で用いてそれらの値を求めた。

このようにして得られたパラメータで表現される curve (心, 肝) はもとの実測された time-activity curve とよい適合を示した。

分布容積はこの適合性を高め、モデルの curve と実際の curve との残差自乗和を改善した。

このように ^{99m}Tc -PMT の肝胆道系における動態のよいモデルであると考えられる 4-compartment model に現われるパラメータを正常者2例, 慢性肝炎1例, 肝硬変2例についてそれぞれ求めたところ, びまん性肝疾患では正常者に比べ, 肝排泄係数の減少傾向, 肝分布容積の増大傾向がみられた。

34. Calori 病の肝胆道シンチグラフィ

杉村 和朗 檜林 勇 福川 孝
鍋嶋 康司 松尾 導昌 西山 章次
木村 修治 (神大・放)
水間 和郎 (水間医院)

Calori が 1958 年に肝内胆管に嚢腫様拡張のみられる

症例を報告して以来、この疾患群は Calori 病として知られている。われわれは家族内発生の2例と他1例の Calori 病を経験したので、肝胆道シンチグラフィを主に報告する。家族性の2例は39歳と46歳の姉妹でさらにその姉にも本症の存在が認められる。

症例1: 39歳女性, 腹部不定愁訴のみで肝機能, 腎機能は正常。DIC 後に行った CT では肝における造影剤の樹枝状の出現と肝内の多房性嚢状の低吸収域への造影剤の一部貯留がみられた。 ^{99m}Tc -PMT による肝胆道シンチグラフィでは hepatogram の相で肝内に多数の low up take の部位を認め, 経過につれ同部の activity は上昇し, 60分後の像では同部に集積像がみられた。これは拡張した胆管内へ徐々に RI が貯留してくる像と考えられる。また5分後, 20分後の blood retention は正常範囲内であった。

症例2: 46歳女性で腹部不定愁訴を有する。肝機能正常だが腎機能は軽度低下。CT では肝の所見は前例と同様だが両側腎に多数の低吸収域がみられた。 ^{99m}Tc -PMT による肝胆道シンチグラフィでは前例とほぼ同様であったが2時間後に腸管への排泄がみられた。

症例3: 63歳女性で主訴は上腹部痛, ERCP では結石なく総胆管と一部肝内胆管に著明な拡張がみられた。 ^{99m}Tc -PI による胆道シンチグラフィでは45分後の像にて総胆管の拡張と左肝内胆管の一部に著明な拡張がみられた。この時点で核種の腸管内排泄は良好に認められた。

以上3例の Calori 病について行った肝胆道シンチグラフィは, CT・超音波検査とあわせて診断に有用であった。

35. 肝シンチにて経過観察しえた急性重症肝炎の2症例

塩見 進 黒木 哲夫 門奈 丈之
山本 祐夫 (大阪市大・三内)
大村 昌弘 池田 穂積 浜田 国雄
越智 宏暢 小野山靖人 (同・放科)

急性重症肝炎の極期より肝シンチを施行し経過観察しえた2症例を報告した。

症例1: 41歳男性。入院時昏睡I度であり検査成績は GOT 3860, GPT 2740, 総ビリルビン 6.9 mg/dl, プロトロンビン時間 22%, ヘパプラスチンテスト 10% 以下